近代御會和歌集　二十五

和書門 類
二七九五七 號
七七 函
一四 架
三〇 冊

内閣文庫
和書 類
二七九五七 號
三〇 冊
二〇一 函
八 架

内閣文庫
番號	和	27957
冊數	30	(25)
函號	201	98

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

近代御會和謌集目録

禁中御會 貞享三年正月廿四日
題 池水浪静
聖廟御法楽 貞享三年二月廿五日
賀茂社御法楽 貞享三年九月二日
六十五首

水無瀬宮御法楽 貞享三年二月廿二日
卅首
内侍所御法楽 貞享三年六月

日本政府圖書
明治十五年購求
淺草文庫

貞享三年正月十四日　禁中御会

池水浪静　御製

さゝ浪ものとかによせて春は日のひかりにはゆる池のおもかな

一条
関白冬経

池水の浪はおさまりて空万代のかけやうつれるよの春をしらは

近衛
左大臣藤原基熙

波のあやにみえし氷はとけそめて世春のとかなる池のみきはや

鷹司
右大臣兼熙

たえまなき君か代の春見えて御池の水は浪もしつけき

有栖川
幸仁親王

春されやみきはの氷とけ初て御池乃波も志川也花

宝来院
沙門義延

吹風も枝をならさぬ世乃春をいはひてみえし御池の波も志川なる

花山
内大臣藤原定誠

氷とく御池乃波のさゝら為にし志川かなる世の春はみえけり

大炊御門
正二位藤原経光

幾千世乃春をとり君をまもりてん波越さる池のおもかけ

菊亭
正三位藤原公規

氷とけ波志川かなる世の春にみえてのとけき庭の池水

清閑寺
権大納言藤原熙房

吹風も枝をならさぬ世乃春をみとり御池乃水も波や志川けき

徳大寺
右近衛大将藤原実通

動きなき御池の水のとけさらに静まる世の春をみるかな

烏丸
権大納言藤原光雄

氷とけ氷にみかけてん池水も志るしなりける人

柳原
権大納言藤原資廉

早春の御池波志川かなる春に天世てみ池の波にみえて

油小路
右近衛中将藤原実起

吹風も枝をならさぬ世にかへて此御池の水も春にのとけき

菊亭
権中納言藤原伊季

なとけしな氷まけぬつ池水乃みきはゝ志川見えわたりなかゝし

久我
権大納言源通誠

氷とけて水のみとりもあさ浪やしつかなる春の池水

九条
権大納言藤原輔実

よろつ波もはるかにみえておさまれる代のたのしみを庭の池水

鷹司
春宮権大夫藤原兼基

千世ふともかすむつる川たえせて君か御池の波のゆたかし

園
正二位藤原基福

なとしもしれ八幡乃神もかけまくも長閑御池乃波にうつして

小川坊城
正二位藤原俊広

はとなきは御池乃表にかゝるかへすかへすも波もなきかな

中院
正二位源通茂

かさなる池のさゝれ石も世の名を浪にうつされぬなかれ志川そさ

清閑寺
従二位藤原熙房

君か代のみなもとひろみえ池水の流もつきせぬうれしさ

勧修寺
従二位藤原経慶

庭の松にかけてそうつる御池乃波乃たえやらぬ

三近
従二位菅原長

宮内の波はなき御池になかれてや波もしつかに千世のためしに

日野
権中納言藤原資廉

と氷とけて御池乃水ぬるむ春日ふかきに波もたちけり

中院
権中納言源有維

吹風もたえぬる御代は波よせてみぎはにしげる松乃池水

万里小路
権中納言藤原淳房

春風に波もたゝねば萬代を御池の氷とけてしるらし

正親町
権中納言藤原公通

はや吹る乳池の東乃春風に氷ハとくる波のたつらむ

坊城
権中納言藤原俊量

四方乃海池のこほりもとけて波志づかなる御代の人乃庭

東園
権中納言藤原基量

四方乃海波志づかなる君が代と御池の水乃春にみえけり

清水谷
権中納言藤原実業

冬ながら御池乃松の千世のけしきつねもときはに波もさわがで

庭田
権中納言源重條

池乃氷ハ春にうちとけて鶴白のとふふかくなる水かき

平松
正二位平時量

長閑なる春の御池に氷とけて御代のどかなる波ぞ立らし

水無瀬
正二位藤原氏信

九重乃御池のこほりとけそめて風よりさきに浪乃春たつ

西洞院
右衛門督平時成

はるかゝりて志らなみや風もとけゆく春の池かな

裏松
参議藤原意光

沖つ風ふくともなみのあさ氷むすびもとけす御池の波の花とける

沖山
左少将藤原隆真

在宮すみきみの日かけに池水の氷ととけて流れも志らし

中山
参議左近衛権中将藤原篤親

此比は志らぬに今日なき御代のうへやまつ世の池かな

清閑寺
参議左大弁藤原熙定

志きしまや代々のたえぬ代の春とて御池の水の流も志らむ

参議左近衛権中将藤原嗣章

氷ゐし池のみぎはもうちとけて春にのどけき波の色かな

川鰭
従二位藤原実陳

浪風もさはがぬ世のためしとや御池のみぎは氷とけける

風早
従二位藤原実種

長閑なる氷のけさはとけて波の花いけにも春の池かな

愛宕
正三位源通福

日かけさす深みどりの氷うちとけてよ浪にたとけさゝ池のさゝ波

七条
正三位藤原隆豊

水鳥の羽かぜもおもふ春風に御池の氷とけてのどけき

山本
正三位藤原実富

四海乃海人浦の波の志川けさにみえむや聖人乃池のかゝみに

白川　正二位源雅富

四乃海おさまる波の志川けさも春の御池のおもにそしる

久世　從三位源通音

よろつ世に波しつかなりて君か代乃長きをうつす庭の池かな

穂波　從三位藤原經尚

波よする御池乃氷のかゝみにもかはらぬ千代のかけうつるらし

日野西　從三位藤原益光

としのはや御池乃氷とけて波志川かなる君か代の春

伏原　大藏卿清原宣條

なをまさる御代の春とや氷とけ波しつかなるけさの庭の池かな

三室　宮内卿藤原保春

楽しさをみるにつけても世々あら玉池乃波も春に志つけさ

樋口　從三位藤原隆康

つかへ君乃ちよをかさねつゝみきはにて波志川かなる春乃池かな

梅溪　從三位源英通

氷とく御池乃波にみちくる君か代乃春やかきりなからん

竹内　刑部卿源惟庸

いつしかも氷のみなも今とけて御池のおもにかけそ見えける

押小路　從三位藤原公起

風しつかなる代や波たゝぬ汀まて春のいけ水

唐橋
左近衛権中将源為忠

春風にみきはの松に吹よせて波あらふなる庭の池水

水無瀬
従三位菅原為長

咲かゝる日影とみせて春風は池のおもてにかゝる波風そ吹けり

若菜
民部卿菅原為範

千世のためみきはの松のかけそへて波ゆたかなる庭の池水

外山
従三位菅原宣綱

家鴨や尾上の松も春雨にほかなる波や汀池の春にたちなん

山井
春宮亮菅原長之

波風ものとけきみなのいけにこそ君か御池の春にかゝらなん

菅波
従三位大中臣清忠

いさゝなみみきはの氷うちとけて春にのとけき池の水かな

同
蔵人左近衛権中将藤原基猪

池のおもに春のひかりを先みせて氷とけゆく波のはなとけき

小川坊城
蔵人右大弁菅原俊方

岩もる水は氷とけていけの波の立かける御代の春かな

萩原
左京大夫藤原兼従

雪しき氷とけて春日さし君か御池の波そのとけき

三室戸
中納言大輔藤原輝光

氷とし見えしもとけて波よする御池の春は風のみそしける

梅小路
中宮亮藤原共方

うらゝなる日の影うつる池水に春越みえての波も立ける

平松
少納言平時方

春風に御池の氷とけそめてさゝ波よする水にのとける

石井
少納言平行康

なかなかに御池乃春の白さらに風ふきよれは波もかはれる

植松
右近衛権中将源雅永

池水も春めくひかりそへにせて日影うつろふ波のさやける

右近衛権中将藤原公屋

春風のあふるゝ波も池水にけふそのとかなる世とは見えける

白川
神祇伯雅元王

風さえしみきはの波も立帰る御池のおもにかすむ春哉

堀川
右兵衛佐藤原為綱

春風に御池の氷うちとけていさら波の音も春めかしか

下冷泉
右近衛権中将藤原為經

よせかへる波も音なくのとかなる春風わたる庭の池水

高倉
民部権大輔藤原永福

春風に御池の氷とけそめて波ものとかなる九重の庭

飛鳥井
右近衛権中将藤原雅豊

風ふくみ御代乃春とて池水乃氷はとけてのこる波もたゝせし

正親町三条　右近衛権中将藤原実久

和日乃年のはしめの君か世の春とそ御池乃波も志つけし

中院　左近衛権中将源通躬

池水乃みきはの波も九重乃春のひかりにとけしのとけは

冨家　左近衛権中将藤原隆安

天さかえ人もことしもさかゆく藤原乃池の波のとけし

花園　右近衛権中将藤原公晴

池乃おもは氷とけゆく春風にうちよるもしつか水乃さゝ波

冷泉　左近衛権中将藤原為綱

氷とけし春乃御池の岸根松千世のかけみえて波ものとけき

竹屋　右衛門佐藤原光忠

風かよふ御代にも池乃氷かはうちとけてこそ波のさゝめき

綾小路　右近衛権中将源有胤

幾年の池乃みきはに風なれて加ゝるゝ松にのとけし

武者小路　右近衛権中将藤原実陰

池の面は氷もとけて浅緑みつかねをかきたつ波

岩倉　右兵衛権佐藤原国久

春風に御池乃氷うちとけて波も志つけき九重の庭

河鰭　左近衛権中将藤原実守

はるかしれ氷とけぬ春風に波のあやなす池のおもかけ

左近衛少将藤原実基

さえくらし嵐も胡波あらきてよるよる波なき池のこほりさ

蔵人春宮大進藤原経業

池水の波にしつかにおさまれる君か代見えて春ののとけき

中宮権大進平時茂

あらたまのとしとけぬる春はけさ急て御池の波も志つか成世と

左近衛権少将藤原季縁

深くれし御池の氷うちとけて波のとけさ万代まて

左近衛権少将藤原公敦

四方乃海の波志つかなる雪消えてかゝる御池乃春のけしきは

左近衛権少将藤原公光

のとけしな水のみとりに春見えて御池乃波にうつりける世に

左近衛権少将藤原秀盛

君か代のみなもとすめる世の春に御池にすめる波そのとけし

左近衛権少将源光親

吹風も志つかなる池のさゝ波も世の中に岸乃松の...

大膳大夫藤原長義

さえてれし波も志つかに吹風もおさまれる世の春の御池は

修理源通清

此比はしれみぎはによする浪の音にもしるし君が御池哉

春宮 中宮大進藤原弘昌

春にしれやちよへの池の氷とけて音する浪は春のしるし

正五 侍従藤原基信

せきいれし御池の水のうちとけて此比よりもしるき世の初波

従五 蔵人左少弁藤原資定

氷とけ浪よる風もうちそひてのどかにかすむ春の池かな

正四 右近衛権少将源具統

出来し池の氷もうちとけて浪のよるさへ御代の初春

読師 右府 三条大納言実通卿

講師 小川坊城侍従右朝臣

発声 新原中納言 庭田重保卿

出題 飛鳥井雅豊朝臣

奉行 烏丸大納言光雄卿

貞享三年二月廿二日　水無瀬御法楽

霞為衣　　御製

春やいつ霞の衣かハ袖つけて立のたちよりなきにけるかな

閑中鶯　　中院大納言通茂

ありと世の人にかくれ家ふかき窓竹に秘す人の鶯

柳似烟　　左大臣基熈

小きたへ家里に絶えのの御原その礼も柳の色をそへけり

若早蕨　　為綱冷泉中将

これはへて春のもえ出し蕨をもおもへは人のうれしさかな

園前中納言基福

春の夜は更ぬる山に霞みつゝなかそらにのこる方の月

遠尋花　雅実太政大臣

たつねつゝまたみぬ花をたつねきてよしのゝおくの春の山かせ

花留人　一条関白実経

あかれなむ花のしたかけ咲かぬまに花見る人をとゝめても見て

雉思子　同前大納言基輔

子をおもふきゝすやけふもかすむ野にたちよる末のあとたにもなし

路苗代　しら川前内大臣公親

せき入る苗代小田の水かけて行人たゝぬあせのかよひち

残春月　鷹司太政大臣兼平

春風にさそはれみえて霞たつ花の名残をおもふのこれる

不逢恋　日野中納言資宣

よのまよりかなしきよりも中〳〵にうき人のなさけはなし

言出恋　水無瀬前中納言氏信

情なき人にいはれぬ思ひのほとをたにしらせてもかなし

稀逢恋　花山院前内大臣定雅

あはれみしこよひの月日へてまた逢ことはかたしかな

変約恋　久我大納言通誠

きみかくしおもふやうにもちきりしのことのはそ

借恨恋　鷹司大納言基忠

おもひけるこゝろせてかへしも玉章に恨ハ我ハまつらむ月そなき

関路恋　　庭田中納言重條

鳴鳥の声ハあけ行関の戸も我ハ不破かきかさらの山

市商客　　白川二位雅喬

かきまねくみ手の袖のみそすゝ家民の出入市やちかきて治まるちよ

羇中夏　　水無瀬三位為孝

ぬるゝ袖ハかわく旅ねの夕すゝみ都ハ今の夏ハもとこそ

海眺望　　今出川大納言伊季

春をあさこ加とむ嶋花波のちりてもたかみ出るあはぢ嶋山

寄社祝　　大炊御門前内大臣経光

まもれ我神の誓ひのみしめ縄なかくそ君か代の末

出題　　冷泉中納言為綱卿

講師　　月

奉行　　庭田中納言重條卿

貞享二年二月廿五日　聖廟御法楽

早春浦　御製

春きぬと霞に今日ハ宮子乃名に波ぞ立かへるなりにけるかな

春濱霞　庭田中納言重條

沖つ乃波ハ霧せぬ大空風そ立て霞をみなそこにけり

残氷　清閑寺大納言熙定

日影さすかたへハとけて池水乃汀のなみにうちとけにけり

春情有鶯　久我大納言通誠

こゑたてゝおもてかたき鶯乃まつ我心のなれ乃かたき哉

依風知梅　水無瀬前中納言氏信

けふ乃雨も山ゆ谷をわたりて風も梅の香ハ人よりも先(?)

古柳　水無瀬三位兼豊

いにしへのまへの柳わかぬいく世の春をしるらん

朧月　正親町三条中将実久

あはれ見る花ぬ跡のみえて庭の面わもよそにかすむ朧夜の月

暮山春雨　万里小路中納言淳房

夕日影うつりもみえて山の端ハ霞にくもる春雨のそら

遠村花　小川坊城俊方

春霞たなびく外にそれとみゆる里ハ遠山本の花のさかりと

花留　清閑寺宰相熈定

山ハ猶松のみとりも色そへてひらけそむる花の香ぞする

観落花　今出川大納言伊季

さそひ行風にまかせて散ともしれ春のこゝろの山さくらかな

船中暮春　堀川右兵衛佐康綱

漕て行春のとまりハいそこ志ら波のしるべもしらぬ舟のよるべか

首夏夜　白川二位雅喬

夜ゝに吹南の風にちる花の名残ハうつりかハらぬ

岩卯花　西洞院宰相時成

かねてけふ人のゆかしき衣のへにほさまやみえて咲卯花

雲間郭公　東園中納言基量

一声はよその雲ゐにへたつとも月のかけまつ山ほとゝきす

採早苗　　　高辻前大納言豊長

時をえてとりそふ早乙女子か笠乃露けき小田乃早苗遊

菖蒲　　　梅渓三位英通

ひき初るけふのあやめの香にそ思ふ軒はのしのふ袖もかほりて

蛍火秋近　　　飛鳥井大納言雅章

秋ちかき夜半乃蛍乃かけみれは風の音にも涼しかりけり

禁裏納涼　　　平松中納言時方

松風も吹わたる御垣もりなれは夕すゝしさにすゝみかはしく

二星適逢　　　広幡右大臣豊忠

さゝかに天の河辺の秋風にあひ見し夜半のあかつきそうき

露眺　　　梅小路中宮亮共方

ひまもなく草葉にむすふ白露のいく夜秋風にたまりかねて

独聞荻　　　白川中将雅元

夕暮は荻の葉そよく秋風をひとり聞つゝ袖そぬれぬる

薄帯伴友　　　川鰭右少将実陳

折々にしのふ尾花か袖にまねかれてともに分行野への夕暮

槿未開　　　日野中納言資茂

月のかけ明行空のまかきにも露まちかねて朝顔の花

虫怨　　　勧修寺大納言経慶

わかれにしその秋よりつゆならぬことも虫乃祢にそ鳴

草邊雁　　今出川前右大臣公規

宿にわかなとやさそひぬる思ひてわたるへの雁乃声きかぬめ

月前鹿　　清水谷中納言実業

いふ又心流てしのまおもひそへて高ねの月にとしかなるらん

月前松風　　高倉民部権大夫永福

影ちかう兒松つきたちて秋風にすゝりすゝゆく庭の月影

古寺秋夕　　正親町中納言公通

古道乃花寺にあかしうき秋の夕暮そ見の数し

竹籬紅葉　　飛鳥井中将雅豊

暁ゆは今ハ月乃色やらん雲のかゝれる山のはみちかき

惜秋　　千種前中納言有維

限りてこ年も秋乃とまれぬてふるともわれをとおしみぬるかな

時雨告冬　　一条関白冬経

冬きぬとやふ志らせて時のまにくもりこたれと時雨あはれ

冬枯　　柳原前大納言資廉

あはれにも霜のこして枝もえぬ松あるなかの松の木かけし

津冬月　　石井中納言行豊

村冬る行来としつる波ひとさの月のちかしいらこ

池鴨　　烏丸弁宣定

あさからは相風いふ寒かりん汀ふさかりて池乃あしらも

雪埋菖径　　按察中納言定基

山人乃来しと跡ハ馬しぬて雪ゆりてむし菖乃かれ石

関屋雪　　竹内三位惟庸

こほりん関のけやしゆき雪ふしと跡ふゆりもしわかさみれ山

松神楽　　山本前宰相実富

霜ふ夜をけれハむしとふさもゆりをぬすふさふ神楽

欲出祠恋　　唐橋三位中納言在

いハかくさしもや日本志花ふれ御まもなん袖のおみさき

閑人恋　　裏松宰相意光

年つてもみの兎ハすこの袖をゑりぬりふらてかふかのこゝろ

適逢恋　　中院中納言通躬

ちよしのかけさとさすやゆかるよ人兎れひまこまし乃かあらん

別恋　　大炊御門前内大臣経光

聞をみて枕ハまさゆら把名ら袖よハいとさしいつすきまうれ

疑真偽恋　　中院前大納言通茂

なのまゝや袖ハきくるてをの空し今めのあれみやぬまをか

顕恋　　園前大納言基福

世ふ流しむ袖の涙ハ志つれしとさつまくるなやえてせん

山家嵐　　速水前宰相基懸

うこきなきみよのためしや世ハとても今ハ猶よし山のいく代ふぬ

澗槙　　烏丸大納言光雄

まきのはやいはねによりて年経へん苔ふかきのまそひきしきて

田里　　萩原右兵衛佐員従

年ふる里にすめる民のうらやすくよへとも小田にいそしそふ

鶴声遠聴　　風早前宰相実種

夕まくれふきよるかけたかたかる風に松よりよするしらへの聲

海旅　　九条大納言輔実

かちまくらいくよあかさむあし浮寝もしらきしほ風のおと

祝言　　花山院内大臣定誠

生をしむりしとも只々一秋の月ちよに見る君の千とせ

内侍所御法楽千首和歌　貞享三年五月

第一十九日

立春

万代のはしめひらけて出る日の長閑にてらす春は来にけり

子日　　左大臣

ちとせひく子の日の小松ちよの始千世のはしめ君か契りは

霞　　定基朝臣

けさよりハ霞たなひく此山のはの高根はるかけしかし

鶯　　実陰朝臣

春ハまつ川花さく梅の初音乃ふかい色つゝし園の鶯

若菜　同

春さむき野への雪まは猶たえて若菜はつみそすさむ

残雪　時方朝臣

風さゆる山下かけはきえやらて春も友まつ松の下雪

梅　前源大納言

色は猶雪にまかへて咲初る雪より匂ふ梅の一えた

柳　民部卿

行水にうつれはなひく乱れて春風わたる岸の青柳

早蕨　為綱朝臣

すきし日もおもふにかへし初わらひ野の若草にまかれて

桜　雅元王

峯は猶尾上の雲に埋れてきえぬは花の色かとそ見る

春雨　同

ぬれつゝもひとりかさねてきのふに晴間も見えぬ春雨の空

春駒　花山院

一むらの若草にほふ沢水に春駒の草のまにまにはなれてしあそふ

帰雁　権中納言

古郷に帰るかりかねみすてしも山の霞に立帰るらん

呼子鳥　定基朝臣

此夕へ誰をまつとて呼子鳥ゆふくれことにみゆる山路に

苗代　前源大納言

よそにし山城まては(?)かはらすや苗代いそく小田のますらを

菫菜　雅光王

あかしえぬ野となる宿もゆかりしきひの野によ(?)すみれは

杜若　水無瀬三位

ゆく水もしつかにかよふ[illegible]つくるそ人の庭のかきつはた

藤　刑部卿

春の色はこきましみせて枝ことにかゝる(?)一松の藤なみ

款冬　前源大納言

よそにみてたのむへよりそ山吹の花の色[illegible]

三月尽

あかしてもなをなかりけりかはるへき春はけふよりあとのおもかけ

更衣　源大納言

きのふまてなれし袂にぬきかへてなほ[illegible]

卯花

ゆふ春のかけもなき(?)雪かと見ゆるうの花

葵　儀同三司

しらとりのみそぎの[illegible]葵のかつら

郭公　新源中納言

ほとゝきすなかなくなり(?)[illegible]

菖蒲　権中納言

ぬきとめくこれや五月の玉にみんあやめかゝれるみきはの露

早苗　前源大納言

打なひく風涼しく植そてみとりに清く山田はやなへ人

照射　右衛門督

ますらをや端山しけ山くさかくれ外にはみゆる照射さへし

五月雨　新源中納言

五月雨のをやみもみえすすゝか川千代の波乃音はのとけて

亀橋　り山大納言

雨

村雨も涼しく影にかはるらんこれより花の枝よりさし

蛍　裏松宰相

月いまた木のくれかけに青のひかりあらはにみゆるほたるか

蚊遣火　源二位

さしのほる川にしつか婦が家のいふせん夜のまかへしゆくをしらて

蓮　右衛門督

白露はむすふとみえてかはりゆく風さそふ池乃みきはを澄

氷室　刑部卿

夏衣あつき日乃山のけちかき氷ハ世乃こゝろなれん

泉　同

山かけの岩根の清水むすふにもかつよるへ秋の初風

荒和祓　押小路三位

川やしろよる人数はくみそめてわつらひも流てみな月乃そら

立秋　同

袖の上ハ露よりさきに吹そめしあさけ涼しき秋の風のおと

七夕　同

天河かはる世乃秋とちきりおく川の瀬風の今宵まてへぬ

萩　為綱朝臣

玉とちる萩か下葉の露も花の色に染てこほるゝ庭の萩原

女郎花　宣定

女郎花名を残しつゝ一夜ねん秋の野風のすゑになひける

露　新源中納言

秋風に吹かへされて石の上乃尾花か袖にしかも夕露

刈萱　新為元朝臣

萱か下の露やかゝらんかるかやのみたれし野への露ふかき

蘭　日野大納言

ふちはかま露そへて野辺の袖風に花のかをしき匂ひぬるかな

荻　源大納言

秋の夜ハ庭の荻原そよきて更ゆく月乃風そ身にしむ

雁　新源中納言

村雲の月のよそにみえて比翼の秋風にさそはれて帰る

床　　源二位

去し秋をわかれし暁の露にぬれても床やなからむ

露　　水無瀬三位

秋はいつ夜のたもとやおきそへて夕暮ふかし袖の露けさ

霄　　通躬朝臣

まち人の来るやおそき立出て夕霄かけし袖のまつらむ

槿　　右衛門督

朝かほのしほれてはてぬ葉のうへにとはれし後の露もむすはす

駒迎　　権中納言

東より君かめくみの露わけて来るもひくや望月の駒

月　　刑部卿

池のおもの月かすみけり宵の間の雲も海風と見えつゝ

擣衣　　水無瀬三位

山かけの袖や夜さむにかつ衣あつるかけてきぬたなるらむ

虫　　日野大納言

秋といへは夜の寝覚みの暮ぞ虫の声しのひかたき

紅葉　　儀同三司

時雨してしのふの色の増やけふ栴木か庭のもみち葉

菊　　通光朝臣

さくよりも霜の花の菊にいろかはる種のたかくにほひて

九月盡　為綱朝臣

とまりしも思ひしれともけふの空暮行秋のなこりをそする

初冬　民部卿

冬きぬと新陽の梢に吹はらふ音もはけしき山嵐

時雨　日野大納言

くれかゝる時雨の空の晴ならし雲の夜はぬれて月やすむらん

霜

さえ霜に埋もれてま枯の落葉にさきはなをそえつる

霰

雲さむき空より霰誘ひきて嵐の風も音はけしく

雪　儀同三司

詠てみるもあかぬ白妙雪の鏡のかけも忘れにし

寒芦　為綱朝臣

難波江や冬かれはつるあし原に霜もくたけし霜の影哉

千鳥　日野大納言

ちる雪の松をしたひて夕浪に鳴千鳥の友をよふなり

氷　時方朝臣

今朝は汲川猶のこる水の底なるをみるほと氷そ結ふ庭の真砂

水鳥　右大臣

河なみは氷にをれぬ芦のはまみえて寒けき池のをし鴨

網代　　前源大納言

守あへぬ袖さへかけし河風も更行ほとみのよるかれし網代ゐて

神楽　　風早前宰相

九重の庭火のかけも更る夜の霜をみつゝうたふ榊葉

鷹狩　　民部卿

音羽と又みかりの小野の暮まて草わくる鷹の行末もなし

炭竈　　権中納言

打なひく煙も人にしらせけり原の里の宮の山本

埋火　　左大臣

月花は行をあはれとおもひしも老の身つらき関の埋火

除夜　　裏松宰相

名残と毎年の一夜に暮はてていかにかはらん

初恋　　同

今朝の今まてまつゝ心を恋の山よりてゆかれんみち

思恋　　風早宰相

いかにしかく思ふ心の色見えて思ひあまる心ともしれ

不逢恋　　宣経朝臣

迷ふ身の行末よいかにかくこそ年代のまつにかる恋路うらさん

初逢恋　　権中納言

まちつけしその日をいつとしもなくつもる月日を

後朝恋

わかれつる言の葉の雨はなみたにてかはくまもなき枕のうへそ

遇不会恋　　風早宰相

よひよひのゆふくれかけてまちしよりしらぬ枕のわかれかなしき

旅恋　　左大臣

大方のやつれはいはて旅衣夕日のかけに思ひ出し

思　　右衛門督

われならぬ人もまちけむとしかくてすくる月日の思ひせきかね

片思　　宗定

かくるへき人の心をしらすしてはかなくもまつ袖の涙

恨　　土御門大納言

よしやたたあひみてもなにかはせんとうらみてもなほしたふこころは

暁　　儀同三司

ある夢は人にかたりてさむれとも秋の枕のつゆのふかさを

松　　風早前宰相

数ならぬ我身をしらて君かため千代もと祈る松のたのもし

竹　　左大臣

ときはなる緑の色もかはらしな竹のもとなるよよのすゑ

苔　　源大納言

世を遁するその家のしたて谷深く苔のむしろをしきてこそ見れ

鵆　　通躬朝臣

こほりやして芦のかきしの夜寒さもみちて見る白浪

山　　時方朝臣

をりくのすかたをあかぬ春秋のむかしもみちよ山のかけさへ

河　　民部卿

涼しさは長き流の清かりて川瀬きよ流れの水のしら波

野　　時方朝臣

なしわけ世をは出つゝしも見しかとしもよこ庵と末は

関　　藤原大師て

旅人は世にもやすらむ心もかはるらん行世世の足柄の関

橋　　源二位

打わたす瀬わたりのあとをしるかたは浪にうつろふ野中の橋

海路　　同

出船して波にかくなしてしつやゝ近よりも沖の船かな

旅　　時方朝臣

行つくし友まつ人のかりふしに末遠くへ宿をとるらん

別　　宣陳朝臣

とまる人はよし船なりと別路に砂にはなつ心をさきつき

山家　　水無瀬二位

世の中はいとひのそきてしらし山にかくれしきたる庵の松風

田家　　通躬卿

山かけのきたるにかゝる山はたもしくしめゆふ縄のかゝる庵

懐旧　　為久朝臣

さ雨しに見なれしにつけて思ひ出ることは数ある人の世の中

夢　　雅元王

夏かけて山も見えしあつき風静なる松のかけに探る夕風

神祇　　裏松宰相

かけまくも廣き御めくみ神垣すゑ東ゆくあふくなはらし

述懐　　隆三位

日にそへて流るゝ月日を見てもあさましく何をかせん

祝言　　押小路三位

我君の千世のしるしと治まれる人のこゝろも浮世なる大和言の葉

第二月日

立春風　　　　左大臣

一夜あけて春立けさは朝戸出に去年のなごりの風もかはらし

霞始靆　　　　通躬朝臣

しき嶋や霞の衣きてもなほけさ春しるき天のかく山

池辺霞　　　　為久朝臣

さゝなみも立やかすみのなかそこほりも池の水にとけしはして

田家菜　　　　右兵衛督

きのふこそ山田の雪をかき分て流れるけふのわかな摘なる

巖間雪　　　　新源中納言

さえかへる日のうけこぬ谷の出るを待て老のれはなくねる白雪

待鶯　同

しるしなりけりけさ園の内に鶯の声もききそめて

暁更梅　通躬卿

園の戸のあけぬる音の風に匂ひして独り枕に嗅る梅か枝

夕梅　為光卿

暮ぬまに宿に人をまたさりける此夕はえの梅のしたえと

柳　通躬卿

春風にみたるゝ糸をくりかへしなひきなひかし岸の青柳

殘春草　宗定

波風もしつかにわたりてこき出る夜は浪もかほる春の新年

江春風　良顕

浦風の吹かひもなくたちかへる入江の春の若みとり月

春雁遠　同

とをくしてゆくへもしられ白雲のなかにまかひてかへるかりかね

尋花　同

咲ぬなしとおもへんものと見し花に小くら入こそ芳野の山

初花　時方朝臣

まちて見ん若木の梢もかほるまて咲とさかへん初さくらかな

花留人　水無瀬之位

かつ散さくら花はあらしにあつてそもろこしまてはちらす

雨後花　月

あめはれしすみよしの露もうつ枝にちりしく花やしかのうら風

落花　民部卿

のこりなくちりしくやまかせにして山風のふもとにちる花のしら雪

蛙　右衛門督

かはつなくなはしろ水に山吹のかけみる水もかはらぬ色

款冬　寛松寄桐

春雨のぬれつつ折し山吹のかさねし枝の山吹

新源中納言

一歳をかけし小篠のなかに人わかれ春やまたこそとはしろ

首夏　宗隆朝臣

まちもわひしたつ夏衣かへ春の名残に花の色をかへ

餘花　新源中納言

ちりはてしのちのかたみに山桜ちりのこれるは花のかけ

新樹　前源大納言

うちはらふ夏の衣もすすしくに新樹のちりつもる梢かな

葵　源二位

たれも今朝かけてもゆるの二葉草かけし人のかみにかさす

里郭公　園中将寛桐

此里に折てもかさしへいくさ路その夜も道とまつのとして

市郎之　月

すゝやかき吹すもやさしやかしく湖山にほそ河の清の市人

橋月

そのかみ御らしゆかりの花ハよのつねかりも宮人花は忘

池菖蒲　裏松宰相

池水のあやめ草涼しく河の音もなくしれはしも見えぬゆくしく

初菖蒲　宮家之

今朝そ沢田面のあやめ初風にかひくみぬの花の色そ涼しき

夏月涼　権中納言

紅葉する桂はあれと此やとの山月のかつらは夏そ涼しき

樗川　前源大納言

うちわたる河やわたる明日の夜もさそふ波にそすゝしかりけれ

蓮　日野大納言

葉のうへし池のみきはに風わたる蓮のうき葉の露の白玉

氷室　同

氷室山冬なから神山の月のかけそなつにも風そ涼しき地

野夕立　今出川大納言

夕立の晴ゆく跡に残る夜の雨よりやゝすゝし荻の風のみそ立

蛍　前源大納言

水かけ岩根のくれに結ひあけて夏なき庭は涼しさ

残暑

秋風は吹と袖にまた閨の戸のさゝぬをしもしらするかな

詠七夕　前源大納言

天の川あふせの秋は一とせにわかれなるみの潮よ志つゝてや来

山家萩　裏松宰相

さひしさは我住なる山里はむしや露の萩の上かせ

萩　権中納言

むらさきの一もとすゝき咲そめて何となく野への秋萩の花

露

同

露しはは山路にいかに露むすひ袖のなとし教露かし

蘭　左大臣

ゆふされは誰かゆかりのふち袴ぬきかけて小野の秋風

竹露

小枝もとおく白露もたまりけんあさ竹の末葉に小ゆらく露哉

秋夕　裏松宰相

一人なる夕への雨の秋来ぬ桐の葉露にこゝろ漸し也

香恐　右衛門督

寄せくるも志ら菊の下に夜なりしや秋風さむき枝に結ひけん

廉多恋　権中納言

松かせのおとにつけても秋きぬとしられぬる涼しさ哉

雁　為綱朝臣

秋毎乃都の月にわたれはや人にしれ初かりのかりとなくらん

駒迎　通躬朝臣

今も猶やたにみえんやかつらにひきてくる望月乃駒

海月　実陰朝臣

渡りにし心流れて月乃みる影のあはれきらんとすらし

月契秋　雅元王

いく世の秋にちきりても今宵ことはさやけき月はしられん

暁月　刑部卿

又さらにみしはかり袖のうへふしてあかぬ暁の月かけ

見月　時方朝臣

一夜かはみあかぬ物をよもすから見る人のまに月にかなしき

惜月　押小路三位

月はなほあかぬ夜よりも山乃端にいる雲のまに今けもたし

擣衣　実陰朝臣

秋さむき風やのしくれにあさ衣絹まも擣にたけて夜半

黄葉　為綱朝臣

染えても猶色ふかき紅葉乃色に秋乃まゆみ哉

萬枯如何　時方朝臣

暮て行秋乃なこりを明日よりハ霜乃花にや見んと思へハ

山初冬　定基朝臣

冬きぬと松のはかきにおとつれてさそふ嵐の音のはけしさ

時雨　源大納言

柴乃戸に時雨の音乃行々て冬の夜ふかき山風そふく

残菊　同

わかれ行秋のかたみの露乃玉をさきてのこれる白菊の花

橋落葉　前源大納言

吹ちるもみちハいつく重山風乃ほとしもみえぬ谷乃岩橋

冬夕風　源二位

岩清水音乃ゆくへハ数ならて嶺に残れる紅葉の下の山風

氷　同

早き瀬ハむすほれてたる石間行水に氷そさえわたるらん

寒月　同

霜ふかき夜半にさえてかけすめる月を見るかな身に入

千鳥　右衛門督

さよ千鳥つまやこふらし塩にすむ月かけわたる浪に鳴声

鴨　刑部卿

風さゆるうきね乃床やさむからん氷るみきはにさわくかもとも

網代　儀同三司

宵あれきゆゟ人はなくて床も涼しき家隆のおもかけ

霞

志ほかまやこれたく烟のいろかりに霞の朝はわかぬ鹿なり

湖雪　　左大臣

滋賀の海やお浦りの上に雪消て雪も汀に霞ゆかけりそわかぬ

落雪　　風早前宰相

打はらふ袖のうきたび雪のひかりに見ふりてみん宵のあさ

白鳩火　　為綱卿

鵜飼むかふ舟子や篝火の影に夜もしら波の月の夕

関路春鶯　　水無瀬中納言

家しとは鶯の年のこれのたひはいて身の光のうみ

思恋　　　時方朝臣

つかはいふ海の月の思ひにあそふ思ひに秋は為をしかふ

見恋　　実陰朝臣

かりそめに見し人の見しに似てわするゝ日もわかれもなしにそれにてみる

寄世恋　　為綱朝臣

うきそのよ世につくせぬや身にもあくはしくもぬるもあまの年月

尋恋　　河合朝臣

恋しきぬれ人のあはれなる人の初恋をかそふ

契恋　　押小路三位

ちかひしおもひきしもしらぬ人はしるらむ一すちにおもひしらなん

逢恋　同

ひとよねの床にならひし新枕かはしてのちそいとゝこひしき

別恋

そら旅なくなくわかれ路をしらぬにも名残のへたてをしむ有明の月

後朝恋　源大納言

逢見ての形見となせん袖にのこる移り香の朝のうつり香

暁恋　儀同三位

世をすつる袖のなみたにしほれてもみる川のなかれてのちの世をたのむ

逢恋　同

しほやけのあともかはかぬ袖の浦は涙の水はつもりて

別恋　左大臣

うらみてもなにゝかはせん恋衣ひとへにおもふ心はすゝしくて

不逢恋　源信

ゆふかけてをいのちなかけてをかゝる世はなにゝたのみて人になくらん

悔恋　定基朝臣

かくはかりつきせぬ袖の露まさに我つれなさに猶やのこさん

久恋　左大臣

ふる里の月日はふる人の川にみのはてはかなき契りかなつらさ

忘恋　同

さしもあまり種とる海士と忘草人のこゝろに行きかへりなん

菊亭大納言

暁

ねぬよのつらさかさねて見えしはた暁よりの鴫のはねかき

藤宰相　　柳原三位

暮ともまだ見えぬは名残なりけりさそふ鳥の音もゆふしもしたくさきとはね

松居平　　雅元王

世をそむくみとあやにこゝろなき我民ぞ立もて松の木末に

里竹　　月

夜ごとにすゞしきかげを呉竹のちぎりのひかる里は猶ほ

山館　　行光朝臣

のこれてはありし志るべも鶴の音をそれときくにおりにしもすまし

謝氷　　儀同三司

君が見む千世をまちかけて忘れぬ御池水しきまりの志るしをば

田家

冬枯の山田もかざものどかに志るべとやいかにまつらむ

故郷雨　　水無瀬三位

山家のもとには志ら川のかひを月はかきさへ雨ふる古への秋

旅

都出てよはのしらべや旅にしていかにはや見えわたる山かぜ

猿　　刑部卿

山住の軒端につゝきて夕へし松かはしきみまくらふくなき

鷺　同

よのつねに来る明わたる山かけの木すゑに鷺のむれ

海鶴　日野大納言

名に志るく千とせの齢まもるとや鶴住なれし松かけの海

野風　権中納言

ちらすてハいかゝちらん花ハ夜寒の志もをさそふ野への秋風

菊　前源大納言

見るしなき色にうつろふ秋の花の寿のまに大内のかさすと菊そ

祝　日野大納言

あふき見る君か代あらし鶴亀に松の千代の世代かそへて

第三月日

歳中立春　　儀同三司

あら玉のとしのうちより鶯のはるをもまたてかすみたつらん

六月立秋　　前源大納言

六月のてる日かけにもたちかへる秋風よりも初風もなし

歳暮衣　　刑部卿

ゆきて見る春の山松風さえてしはすの衣たちかへるらん

七夕織女帳　　柳小路三位

七夕のはつあはせにやかけつらん雲のとはりもたえて待らん

梅香帯雨　　儀同三司

むしろや君かしくなれはさかゆく山の梅かゝる袖の梅か香

旅宿逢花　儀同三司

袖やちる花も旅寝の夜露すゝむ枕の下にまよひなるらん

水郷柳　為綱朝臣

此朝風水のまにまに青柳の色なひかくるよ秋の川なみ

故郷萩　雅元王

あれにし人はふるさとの里に秋はなほさける萩の都

澗蕨　新源中納言

若ゝし谷風ふれはうるおひてつらね折つゝ谷の下わらひ

砌蘭　左京大夫

さゝなみの音もきこえてうらちかき海かこゝろひとつ夜遊の松風

春月　左大臣

春の夜の月かけしめすひと夜遊てはなくてゆかしき朧月夜や

秋雲　日野大納言

とゝまらぬ花ものちらん露あらし山のはみちれ秋のうき雲

秋曙　時方朝臣

多くひとや波しひとり川の秋霧原八十瀬かゝる秋の月かけの

秋夕　水無瀬三位

すきハ世の秋のなかひとつなかめこし夕へハ袖の露そひさき

春風

四方の空のとけき春駒も五日の風も吹やしつか

秋雨　　押小路三位

秋ふかき夜半のしくれも音そへて落葉にかゝる山の木の本

初花　　実陰朝臣

なへて世のさかりをまたて咲そめし花もいつしか朝の初花

新月　　裏松宰相

三ケ月の光のかけにひかりまつ行かたしらぬ影の淋しさ

盛花　　梅中納言

風吹ぬ世とや志らなん白雲の世のさかりなる花のしら雲

明月　　前源大納言

立帰る空にもまたぬかけなれや秋のなかはのけふの月

落花　　右近中将

誘はれて風と散しは恨みしれとちらぬ花そ日数へてちる

残月　　実基朝臣

山の端に帰る雁の明かたの有明のひかりもすめる月の影

遠日蘭代　　前源大納言

幾里かまた空うつる稲葉にて日数へてまつ小山田の稲のほつしら

隔夜擣衣　　日野大納言

夕暮に枕にうつる衣うちもまたるゝ程もあまりにて

橋辺苔　　通躬朝臣

よる波のたちまくしみるや咲みちて色はいの橋かゝる藤浪

池畔菊　風早前宰相

詠めくる菊はさかりも大沢の池のほとりに秋をとゝめん

岸款冬

散なからも影にうつる山吹の咲こし岸に落る巌の下水

山館紅葉　左大臣

時雨しもやみける朝のしら露に染にし色を見せて紅葉は

暮春鶯　同

鳴と聞春のかれにも鶯の声きえにけふ暮る中に

暁秋康　風早前宰相

秋来ては嵐の山は音かはる林の名残や男鹿なるらむ

首夏　権中納言

いつしかに夏の衣をきそへて夜寒にかはる外山の端

初夏　源三位

吹かよふ嵐も涼し篠の葉のそよくにしるき夏の夕暮

卯花　新大納言

心あれや志賀の垣根に卯の花に流るゝ水もさてや咲る卯の花

時雨　民部卿

染かねて雲にしくれしもふりそめて時雨ゆく山

遠樵　雅元王

雨もらぬ石井も露みえて萱忍ぬ軒のこえかな

落葉　通村卿

心から散る紅葉にさそはれて誘ふもけしや庭の夕暮

早梅多　源二位

時しらぬ梅はいとはやも今朝田にみやりの雪の軒端ぞ見ゆ

寒草少

菊もまた花さく秋に庭の霜の下葉そかれてまつ見ゆる

潟夏草　新中納言

浪のよる浦の汐風夕風に露もみたれてなひく夏草

江寒芦　源大納言

さむけしな枯葉ふく芦のよところへて入江にあまる冬のうら風

月前時雨　同

時雨月のひかりにさそはれて更行空におよひ出なり

雪朝望樹　儀同三司

里遠くみし梢も軒も晴行空の雪にまかふる梢

雲間郭公　何某朝臣

まちひあや月は空の雲かくれ山ほとときす声ははかりそ

雪中旅人　前源大納言

険しき道あやしくとくみし朝の雪ふりて人の足跡かな

雨後時雨　宗定之

西になりし夕の空にしぐれきて吹いてくもらす風のさむけさ

雪中鷹狩　　同

さしさして袖にはらへる霰降る雪まじりしてわたる御狩そ

夏月雨晴　　為綱朝臣

かきくもりて晴行雨の夕月かげにたちそふ風も涼しき

千鳥渡河　　民部卿

有明の月にひびきて名古やの河風の波のたよりかも

照射　　実陰朝臣

いかにしても照射かけてもやすらひて志ける影の山も見えけり

網代　　兼臣

荒れはてし宇治の河せの霜かれて網代の床ところ

鵜川篝　　同

さえまさる涼しさありてかへるさの夏をしのぶる鵜川

鵜篝寒　　為綱朝臣

暮ていく夜に思へはかなしむる夏の袖の霜ぞ消ゆる

杜蝉　　五条川大納言

夕かれにすずしきかたの夜はれぬ秋の精の蝉のこゑ聞ゆる

池鴨　　新源中納言

池水にうかれいける鴨の羽風のうらめしくも野の床

夕　　兼朝臣

りてとをはさいはされつゝふく風のしらぬ浪まにのこるみをむ

神楽　雅元王

あさくらや神へのかんなき月のかけにさしてゆくあさくらのこゑ

暁埋火　押小路三位

埋火志河やよのあけゆくに燃しすゝむ炉の煙

深夜埋火　権中納言

埋火のあたりはいみやかしいきてし宵に深き夜のねふり

老残友絵　風早前宰相

あつめつゝ神にまつるやさけぬらんたきゝやまきせの山桜を

都鄙歳暮　日野大納言

かはしゝ都れは都も鄙もおなし暮ゆく年をしむ心は

寄月恋　通躬朝臣

頼まれす志るよしなくてかなしき思ふ人の面影月にかこつかな

滝紛花　時方朝臣

そことしも見えて立れぬ花か花は風にしたかふ滝のしらいと

寄風恋　刑部卿

我中を秋の露とやちらすらん風のたよりもたえし哉

松風入琴　日野大納言

ことにみて志らへぬるとの琴の音にそひて松風かよふ琴音

寄雲恋　幹栄朝臣

ゆふまくれしくるゝ峯の横雲にかゝりてはるゝ村しくれ哉

雲深水　民部卿

谷は晴ゆく人の跡も水そ一むらくもにてはるかなる庵さえて

寄雨恋　日野大納言

いとしく袖乃涙もかはらしなしのふはさら夕くれの雨

閑家暮雨　源大納言

五月雨のこれまさりゆく雲にはくれける庵しけくさもしき

寄灯恋　水無瀬三位

富士乃根はけふりみえてもよそ人はしるのあこかす燈の影哉

古村炊烟　押小路三位

ひとつ家の垣の庵かなし夕乃烟もさえ見えしはしの里

山館旅行　水無瀬三位

おもひきや松のあとさへ山道はうき人のこゝろ奥の庵さしこら

寄山恋　源二位

志られてや恋せし花は磨ひられ山と積るまて流るゝ恋は哉

寄舟恋　安長朝臣

末流わかよそにやみえんはれぬ夜船の夢乃さめけるかな

原上旅宿　前源大納言

花ふる枕やりせは草葉の光雲も露をむすふし武蔵野ゝ原

寄浦恋　権中納言

おもはせぬ袖にをきける麻の浦波わかこ衣袖よりもなほ涙哉

湊外旅泊　　裏松宰相

あとさしてかへる同し夕波に泊もとめぬ舟のうき身を

寄松恋　　権中納言

心ひくとは見えていつしか年ふりぬ山のは松のすゑもまちみん

山家人稀

山陰のかすかなりとも人めにも思ふにかなふ身のいほりかな

寄貝恋

立帰る思ひかひなく浅き人袋の浦波のたちまちはせぬ

湖上鳥　　?光卿

まつ人は帰る夕の秋の戸にとまれしはしやすらふをまつ

寄松恋　　源二位

わすれてそ見えし浅からて契し心の松はさしやたえしとおし

夜鶴鳴皐　　裏松宰相

夜の鶴さはへにうつる霜の下に鳴のうちにかすみを掛て我子思ふ

寄枕恋　　為綱朝臣

浅からぬ契かはして見つゝ月日たつとも嫁の手枕

暁猿叫峡　　雅元王

ゆきにかはしたれかはた暁の山下に君にしらすや

寄衣恋　　時方朝臣

よそにしかたみの花に我そへて谷川の下よのちきりうけて結ひまし

江亭晩望　　右衛門督

芦のやはあしとみし頃もなく入江にたえ沖のつり舟

寄草恋　　裏松宰相

露かゝみさらぬ年月わかるゝにうきのたまゝく我袖にしみ

草庵聴蛩　　風早前宰相

みゝなれぬとはれやらぬ草の夢さめん草ふかく何の月のたましき

寄萱恋　　新源中納言

いつくせんと秋の夜長に我のいのちをかけ人のなかさる

林下懐旧　　源二位

わか文内のたゝしかなきことゝくよをかへしてきのふになるかな

寄文恋　　刑部卿

うつゝなき花をみるまん我袖のあしたの露のねさめし露

窓桃欲開　　左大臣

咲そめむかすの窓の日影さしもりいて心のかけにて世にも

寄鏡恋　　実陰朝臣

ひとりのみなれし人の面影をかへしてかはるかの

対鏡悲老　　刑部卿

むかしみし面影もなく老のよに我からかはるかの

寄衣恋　　右衛門督

さわかなちきりはかりやさよ衣かへしてもみしゆめもかな

述懐依人　時房朝臣

かくしてなを身をなけくかな人に似ぬ我身のほとはさらに悲しき

為経朝臣　民部卿

いかにして人にしられんまつやまのこゝろはさかなかの涙哉

従事催涙　実経朝臣

あはれしるあはれしれ世のなかも思ふ心によそにそありけり

為家卿　前大納言

かなしきは袖やぬれつゝよひおきてぬるよもとこそ床ならぬ道

社頭祝之

神かきのいそしの波はちはやふるかけちれはまつやよし

廿四 同日

初春　　日野大納言

時しらぬ梢にもやかよふらん都のそらは雪もふりつゝ

霞　　同

よそにみしこしの山のかすみたちかくれはてけり花のさかりに

霞　　宮内卿下

花はまた雪と山の峯もたかみてもかすみそめぬる小野の里人

鶯　　為綱卿下

消のこる雪の梢に梅の香にもよほされて鳴鶯の声

春雪　　左大臣

みよしのゝ花とみましや桜とそさきもみたるゝ春の沫雪

若菜　　時房卿

はしかけて春の光の雪に都の春の色をわかれはしかも

梅　　前源大納言

玉ほこにまよふ風も梅花ゆくにかくれぬ軒の梅かえ

梅　　源二位

ふりしやはいろみえられ雪に見し月に残りつる梅の梢を

柳

春柳のいとしもなかきまよの日に二すちもあらぬいさゝかけゆ

春雨　　日野大納言

より藤にかゝるみとりもみゆる春雨の露にさく藤沢見え春雨さ

源恵

様にのこりし花のもえるかりにたえ花の春ものこりのたえはて

花

このほとに散るほともよしや花さかり待わひるまの数ふる月日

花　　左近

年ふれとおもふなけれとなけきつゝかきりいはぬ花なるらん

花　　儀同三司

世にふるみれは代々の色香になれそめしみよしのの花そしのはるゝ

花　　新源中納言

よそにのみやしてもふりくは日ごと白雲花の下かげ

花

植そへてたのしひやかくて人の代の花にあかなむいかし

春月

明やらぬみねのくもの絶間を月にかすめてもはる

藤　　　柳小路三位

かへるさもみきりの清き紫にほせて色こき池の藤の枝

款冬　　　源三位

誰きても風ものこしてむ日数つゝ色ふかき花を山吹の花

三月尽　　　柳小路三位

花をおしみ春の別の心をもおしみにあまる夕くれの空

卯花　　　宗定

名にたかきおもふ月影も白き垣ほやとなりの卯花

郭公　　　織田三河

これもまた行かふ人の声すなり山ほとゝきす[illegible]

郭公　　　民部卿

ゆふくれの物思ふ宿のほとゝきすなにとて声の[illegible]

郭公　　　時[illegible]卿

初声の[illegible]時鳥[illegible]

夏月　　　水三[illegible]三位

むかしおもふ人の袖なりしや月影はまことに中空に時雨夜の秋

六月夜

跡もなく晴ゆく山の篠原にみそぎのそらの六月の空

権中納言

六月祓

かはらぬはいつもあれともやそむる六月祓の浪の花にてし

螢

前参議

夏山のくさの枕にいさりびのよりくる窓の露の花

夕立

源大納言

露涼みの雲のかゝる庭のさとのうへに露の夕立の雨

納涼

水無瀬三位

いく年夜あけぬにハ秋ぞ吹風の音にすゞし起夜秋日多し

早秋

為綱朝臣

身にそしむ衣もうすき朝あけに一葉もちらす秋の初かぜ

七夕

権中納言

かはらぬ乃あはぬを恋しいつまで待にむかしも七夕のあふせ

七夕後朝

風早前宰相

人の心かけてそいつかはたえむ今朝の涙の袖の[illegible]

露

刑部卿

まさに行えの花の色も露ちる花の影の[illegible]

萩

源大納言

萩か枝に月もやとして宮城野や風まつよの露そみたるゝ

萩　源信

何とはなくあやしかりけり人の心さそはれぬるは荻の風

蘭　良助

明るみゆく虎の花の紐の秋風にとくるに花も色にほふ露

虫　何光朝臣

起きてたをきぬる蘭の花の出てたにあやしむしのこゑ

鹿　時秀朝臣

夜ふかき月にさそはれて小男鹿の帰るさ山に鳴しいてやなく

初雁　左大臣

こゑたてゝくる雁の雲居の春をまちてかへりけり

月　権中納言

秋の夜の今宵なかはの月の海の里の都の月や絶えぬ

月　前源中納言

今宵こそ世にてらしけれ諸越の松風すゝしき月かな

月　藤原宰相

すむ月の向ひの山に入る夜半のかなしき涼やかにせぬ

月　民部卿

宮木の松の風にやとりて高根に山の端の月

月　宗清朝臣

なくさめぬすくいかならむ山の月をみてやこゝろし姨捨の山

擣衣　通躬卿

小夜しかの花野をわたる秋風に砧の音の宿はけふ月

雪　雅光卿

山水の流をとめてさゆる夜の松にかさねて雪はふりつゝ

若紫　権中納言

此寺の春をしのはむみ山木のしけき木末を雲かくすらむ

紅葉　柳原三位

立田山なにかはしくれはてしなくやすらて錦とそなる

暮秋　実泰卿

此秋の霜やはしみむ紅葉はのこゝろをとゞめむ

初雪　押小路三位

ともみえぬあらしもまた木のはにて見しやけさ初雪の色

時雨　雅光卿

冬の来て時雨の音をさそふらむ誘ひつゝさむ風の音さへ

落葉　前源大納言

夢はまた風のさそひもかれてはてゝ紅葉の枝はまてしやは

落葉　新源中納言

村時雨に紅葉のあらし山風のさそひみだれて峰の木の葉も

冬月　刑部卿

風の音も梢にたえて冬かれの庭にしられぬ花そちりける

右衛門督

霰

風さえてくもる氷の庭の面に霰みたれて音さやけし

前源大納言

雪

と朝のまに雪にうつもる家まても霞みやられし庭の松か枝

権中納言

雪

詠めて消りつまく　あくまて積りし雪の明ほの

刑部卿

歳暮

ゆふ人のかさそふことし暮しと明の月日の恋にたのみそ暮とし乃庭

源大納言

かそふれは月日の悔し年と見ゆる草の暮の哉

初恋

左大臣

しのふるにおもひたえんなけきさへおもひしるかにそれとなれ恋の道

源三位

忍恋

袖にかくれておもふ涙ひとしほにまたとる思ひとも猶しのひて

水無瀬三位

忍逢恋

志のをもやおもひしらにや思ふそ心にかけし人の面影

裏松宰相

不逢恋

うきおもひ積りてせしやいひとかりて人のつれなき

不逢恋

水無瀬三位

三月しやよ年経ぬる三輪の山わかそてはいかに杉そよくらん

不逢恋　雅光王

あひもみてなかにしもちらぬ命わすれて年ふる心ゆきと

不逢恋　通躬朝臣

かくとたにたのみしきしなくて徒にすくしはてなん年月はなし

不逢恋　宣定

ひとよひといはしといつはり偽の人にすくる世にしたへはしたふかし

初逢恋　新源中納言

行末しれぬちきりよ命なからへさけぬる枕の下はし

暁別恋　為綱朝臣

きぬ〳〵の別にむかふ秋かせにこのわかれさへかはらすもかし

後朝恋　時方朝臣

なかき夜も一筆とれは暮ゆく心はのこれぬけさはおもひを

遇不逢恋　為長

ちきりこそあはれ一夜にこれはかなし夢路まてさへ絶ぬ心は

遇不逢恋　藤原大納言

今はよしまれにかさねて小夜衣ぬれぬをよそにうちそかへん

遇不逢恋　裏松宰相

いかにせむみちならぬ身を恨みしや人わすれしちきりもたえぬ身と

遇不逢恋　風早前宰相

帰るさはわきみ流るゝ事をいひかそれ路の小夜中も世をや恨みん

遇不逢恋　　実隆朝臣

いかに寝てまたはみるへき小夜枕かりにも結ふ夜はゝ宵の下

忘恋　　風早前宰相

偽りなき世なれはこそのかねてやそて忘るゝ人をうらみした

忘恋　　民部卿

ちきりしを忘れもはし人のかはりてなきつらきもあはれ

忘恋　　行光朝臣

あはてはそ人のつらさも見しりけりそれをまよふ心みの物まうさとも

恨恋　　通秀卿

かくしつゝふるみてし松にはるへしなとりし志る人の待ちさは

暁　　雅元王

月のよき夜つくし鶏の笑ひ声にゆめのつけ鳥も夢をそあけゆく

松　　儀同三司

うつしうゑてみるからあかぬ庭の松千代のみとりもかねてしらなし

竹　　同

すみかこそ寄らむ風にさやかなる小竹は涼しき庭の呉竹

山　　為綱朝臣

帰る山よりゆく代の坂の流れてもいかなる年か絶えなん

河　　右衛門督

夕涼の岩しくら立つ水に風河の夜枕やわたて鳴らん

橋　　風早前宰相

かはらぬはきのふを渡してそのまゝ神代よりして天乃浮橋

関　　通村朝臣

庭鳥乃関とゝまりてあまた秋いくとせや鳴し函谷乃戸さしと

旅　　中院大納言

宇都の山うつゝに越ゆる都なれ夢も見やすくとまれとこそ人は

旅　　とゝ川大納言

明日いよいよ志つゞ山路越ゆとも枕うつて儚しくも夢の行末

海路　　中院大納言

漕舟のみなとや遠くなりぬらん浪まにふかれ山の陰かし

山家

たまさかにしのびし人の通ひ路も雪のとさせる奥の山すみ

山家　　前源大納言

年ふりける世の中いとゝ山陰も又かくさふすみてわいしある

田家　　嗣房

玉あらき霧にみのりの秋をみせて猶かゝる門田のほの蕾

述懐　　嗣松宰相

かくて此世のみよりもとぬ君か代にもうけがきみ(?)と祝ふられたん

述懐　　定基朝臣

なけくそよとんかゆる衆徒にすもにさてこゝろ明ると

懐舊　故居

いかにしくしりし恋しやさふのさて姉をさ給わる道と云ハ

菱　深三居

望しれ南にすみて人と恋て国をうかそ菱のなかハ　雅文生

紙衣

かしこしかこよあり紙衣飾すくもりり内外乃袂の色くこゝ　宗信野居

紙衣

早おさゞ月よとみそしおつくよ立煙神乃ひかりわ成けと　太忠繪

日本政府図書

姉の母をも成かてしおして至の昨のさらゆく世代をとれるあふなん

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan